



ショートコメント

★★★

Data 2024-89

監督・脚本：ニック・カサヴェテス

原作：ボストン・テラン『神は銃弾』（文藝春秋刊）

出演：ニコライ・コスター＝ワルドー／マイカ・モンロー／カール・グレスマン／ジェニファリー・ジョーンズ

神は銃弾

2023 年／アメリカ映画
配給：クロックワークス／156 分

2024（令和 6）年 12 月 28 日鑑賞

T・ジョイ梅田

みどころ

「このミステリーがすごい！」の 2002 年版海外編の第 1 位を獲得した原作の映画化だが、なぜか日本での宣伝はほとんどなし。チラシもパンフレットもないし、主役の 2 人も全然知らない俳優だ。それは一体なぜ？

「始まりは、夫婦残殺事件と消えた少女。全世界のノワールファンを虜にしたベストセラー、待望の映画化！」の謳い文句に惹かれてチケットを購入したが、こりゃ失敗！「こりゃ、必見作品」と「抱き合わせ」で鑑賞するについては、やはり事前にしっかり情報を収集しなければ・・・。

◆近時、「これは必見！」と考える 1 本を鑑賞するのと“抱き合わせ”で、前後の待ち時間がピッタリ合致すれば、もう 1 本観るケースが増えてきた。本作はそのケースで、「これは必見！」としてチケットを購入した『レ・ミゼラブル デジタルリマスター／リミックス』（24 年）との待ち時間がピッタリだったため、“抱き合わせ”で本作のチケットも購入した。しかし、『神は銃弾』と題された本作は一体ナニ？それを何も知らないままネットで情報を集めると、ごくわずかの情報だけを入手できた。しかし、情報はあくまでそれだけ。チラシもパンフレットもないし、新聞の評論もない。それは一体なぜ？

◆事前にネットで得た本作のイントロダクション（ポイント）は次のとおりだ。

ポイント POINT

「このミステリーがすごい！」2002年版海外編で第1位を獲得した、ボストン・テランのベストセラー『神は銃弾』。名匠ニック・カサヴェテスが『ジョンQ-最後の決断-』や『きみに読む物語』に続き、深く人間の尊厳と感情を描き出す手腕をもって、この衝撃作を映画化した。カルト集団に元を惨殺され、愛娘を誘拐された刑事が、過去に同じカルトから逃げ延びた女性と手を組み、狂気の追撃劇に挑む――。鮮烈な暴力描写とスタイリッシュな映像美が観る者を圧倒する、スリリングで美しくも可怖な物語がここに誕生する。

また本作のストーリーは次のとおりだ。

クリスマスの夜、刑事ボブ・ハイタワーの元妻とその夫が惨殺され、愛娘ギャビが忽然と姿を消した。その背後には、悪魔のようなカルト集団「左手の小径」の影が蠢いていた。絶望と怒りに苛まれたボブは、かつてカルトに誘拐され生還を果たした女性、ケース・ハーディンと出会う。深い傷を負った彼女は、ボブの苦悩と覚悟に心を動かされ、再びその悪夢の世界へ戻ることを決意する。法の力が及ばぬ闇を前に、ボブは正義の限界を悟り、刑事の職を捨て、その忌まわしい世界へと足を踏み入れることを決意する。ボブとケース、二つの傷ついた魂は痛みと怒りを武器に、奈落の淵へと進んでいく――。

鑑賞直前の12/27の夕刊に一つだけ評論があったが、そこでは、「かみ合わない2人が、死闘の中で距離を縮める設定は面白い。だが、カルト集団とケースに魅力が足りず、入り込めない。」と書かれていたから、アレレ、アレレ。一瞬チケットの購入を急ぎすぎたか？と反省したが、もはや後の祭りだ。料金を払った以上、鑑賞しなければ・・・。

◆本作冒頭、「クリスマスの夜、刑事ボブ・ハイタワー（ニコライ・コスター＝ワルドー）の元妻とその夫が惨殺され、娘のギャビも忽然と姿を消してしまう」と紹介されているとおりのストーリーが、かなりのハードボイルドタッチで登場する。その迫力にタジタジとなるから、ストーリーに一気に引き込まれることは間違いない。

しかし、当然のように、そんなノワール調のミステリーものでは「説明調」になることを極力避けている。したがって、導入部では、ボブ・ハイタワーの家族関係がイマイチ分かりにくいのが第1の欠点だ。

◆第2の欠点は、「かつてそのカルト集団に誘拐され生還を果たした女性、ケース・ハーディン（マイカ・モンロー）」のキャラクターがイマイチはっきりしないこと。なぜ彼女が「左手の小径」に誘拐されながら生還することができたのか、なかなかわからないから、そんな女性、ケースが、なぜ刑事を辞めてまで復讐の鬼となってカルト集団に挑むボブとバディになるのかイマイチわからないわけだ。

「バディもの」は洋の東西を問わず、たくさんある。日本では、古くは勝新太郎×田宮二郎の“悪名コンビ”もあったが、「バディもの」の成否は、個性と個性のぶつかり合いとその融合の妙にある。そんな視点で考えると、おじさん刑事のボブ・ハイタワーと、カルト集団からの生還を果たしたケース・ハーディンのバディには、本来何の必然性も考えられないが・・・。

◆第3の欠点は、「左手の小径」のカルト集団たる由縁やその実態がストーリー進行につれて少しずつ明らかにされていくものの、なぜこんな組織が実在できるのか、なぜこんなカルト集団に多くの若い女性が誘拐されているのかについての社会的な背景がさっぱりわからないことだ。

また、「左手の小径」のリーダーがサイラス（カール・グルスマン）だが、この男のリーダーシップ性がサッパリ見えないうえ、このカルト集団の“教義”がどうなっているのか、サッパリわからない。そのため、私にはこのカルト集団が、単に入れ墨をして、バカ騒ぎをして、女をいたぶっているだけの“バカモノ集団”にしか見えなかったが・・・。

◆第4に、決定的に不満なのは、次第にボブ・ハイタワーとケース・ハーディンの絆が強まっていくストーリーはそれなりに説得力あるものの、「左手の小径」から命を狙われた2人が、クライマックスでは、2人だけで完璧に「左手の小径」の全員をやっつけてしまう展開だ。およそこんなことはありえないはず。だって、ボブ・ハイタワーはもともと体力、知力に優れた捜査員ではなく、単に事務畑を歩んでいただけの警察官に過ぎないし、ケース・ハーディンはしょせん女。それなのに、武器を大量に持った何十人もの屈強な「左手の小径」の男たちを、完膚なきまでに叩きのめしてしまう姿は、あまりにあまりだ。

◆映画評論家としての活動を開始した2001年以前は、事前情報のないまま飛び込みで入った映画館で何度も傑作に出会った。例えば、『アマデウス』（84年）や『マルコム X』（92年）がそうだった。高倉健主演の『新幹線大爆破』（75年）もそうだった。しかし今回の本作は大失敗！やはり事前にしっかり情報を集めて、作品を吟味しなければ・・・。

2024（令和6）年12月30日記